

生前の記憶が宿るモニュメントとしてのお墓

妻は優しい紫の花が好きだった。

伊達冠石

黒御影石 本磨き仕上げ

稲田石 コブだし仕上げ, 玉竜

紫の花を表現した手作りガラス

「優しい紫の花が好きだった妻が表れたお墓を」
というお施主様の故人への思いを形に

変わりゆくお墓への意識 一族のお墓から個人のお墓へ

お墓とは一族のシンボリックな存在であり、一族で守るという考えが強くあった。

当時の家族形態は、複数世帯がまとまって住まうことにより形成したため、「お墓は一族の所有物」として認知されていた。

しかし高度経済成長期、多くの就業の場が生まれ、若い世代を中心に地方圏から都市圏へと急激な人口移動が招かれた。家族の規模が徐々に縮小し現在核家族（夫婦、夫婦と子供、母子、父子）の割合が全体の80%以上を占めている。そして、単身世帯の増加とあいまって高齢者のみの世帯が増加しており、高齢化の進展と共にさらにその割合が増えるものと思われる。

この流れに伴いお墓への考え方も、複数世帯によって所有する一族のお墓から、一代のお墓、そして個人のお墓へと変遷していく。

近い将来、お墓を死後に住まう家として住宅と同様に個人単位でデザインしていく形が広がるのではないかと期待する。